ファツィオリ30周年記念パーティーで。左にブーニン。
中央が、この日演奏も披露したルビャンツェフとパオロ、
右はピアノフォルティ代表取締役アレック・ワイル夫妻

interview

Paolo Fazioli
パオロ・ファツィオリ

1981年に創業したファツィオリは、今年で創立30周年を迎えた。日本総代理店のピアノフォルティ社は創立3年になる。その記念パーティーが、10月11日夜、南青山のレストラン「リヴァ デリ エトゥルスキ」で開かれた。そのために10月初旬、創業者のパオロ・ファツィオリが来日。また先の第14回チャイコフスキー国際コンクールで、ファイナルに進めなかったことで、モスクワは大騒ぎとなった、アレクサンドル・ルビャンツェフも来日し、東京デビューで、その鬼才ぶりを存分に発揮。2人に話をうかがった。

写真・文◎編集部 原口啓太

FAZIOLI

ピアノという楽器にはまだまだ改善する余地がありますよ

―ファツィオリさんの経歴について教えてください。

私はピアニストであり、機械工学の学位を持っています。

―ピアノ製作の経験はあったのですか。

どのようにピアノを作るかということは研究していましたが、経験はまったくありませんでした。経験のある協力者はおりましたが、とても困難な作業でした。2年かかりました。

―第1号に満足なさったのですか。

もちろんです。すべてがパーフェクトなものはこの世にはないとは思いますが、始まりとしては充分に満足のいくものでした。まだまだ道は長いとは思いましたよ。結果として、毎日毎日、毎年毎年、より良くしてきて現在にいたるわけです。今も常に改善しています。一昨日、日本で最も古いファツィオリを幕張で見てきました。それは25年前のものです。今のファツィオリとははっきりと違いますが、よく手入れがされていて、充分にすばらしいピアノでした。良い材料、良い構造、良いコンセプトで適切に作られたピアノは、歳月を重ねて、より良くなるものなのです。現在のファツィオリより良いとは言えませんが（笑）、すばらしい楽器でした。

―現在は年産何台ですか。

だいたい100台です。いくらか増やすことはできても1000台とかはあり得ません。現在のコンセプト、現在のシステムで、1台1台にオリジナリティーがある手作りを貫くためにはそれは変わりません。われわれの工場は、部品を集めて組み立てる所ではないのです。すべてがイタリアのもので作られています。

―クラシックの世界では古い楽器をありがたがる傾向がありますが、ピアノという楽器の伝統と革新に対する考え方を教えてください。

それは弦楽器と比較してということですね。ヴァイオリンは、とてもシンプルな楽器です。楽器のどこかが動くというものではありません。対してピアノはマシンです。たくさんの部品からなる複雑な機械です。ヴァイオリンは奏者が音を発生させますが、ピアノはピアノが音を作ります。私はピアノの音というのは、ピアニストとピアノとのコンビネーションだと思っています。ピアノそれ自体がたいへんに重要です。そして、私が強調しておきたいことは、ピアノという楽器にはまだまだ改善する余地があるということです。例えば音量です。野外コンサート用にもっと大きい音がするピアノもあっていいでしょう？

―F-308という308センチの世界最大のピアノがファツィオリにありますが、あれより大きいピアノを作ることも考えられますか。

もちろんできます。どういう結果になるかはわかりませんが（笑）。もちろん何らかの限界はありますが、材料とか弦の張力とか……現在では3メートルが限界になっています。ですが、まだまだ解明されていないことは多いので、実験を繰り返して結果がでれば、さらに変えることはあり得ます。

―アップライトピアノを作る考えはありますか。

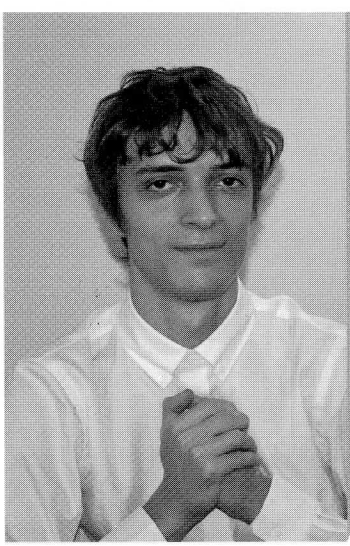
まったくありません。便利なものだとは思いますが、妥協した2次的なものです。工業製品ですから、ファツィオリの作るものではありません。

―ニューモデルの予定はありますか。

大きく次の3つの新型が考えられます。ひとつはどれかのモデルの違うサイズ。ふたつ目は、外装仕上げをカスタマイズしたものです。南青山のレストランにあるようなものですね。そしてそれ以外の細かい改良は、新しく作られる1台1台すべてに行われています。

ファツィオリは不快な音もそのまま出る

最初にファツィオリを弾いたのはサンクトペテルブルクの国立アカデミー・カペラという大きいホールでした。小さいサイズだったのですが、大きな音が出てびっくりしました。チャイコフスキーコンクールでは5台のピアノ（スタインウェイ2台、ヤマハ、カワイ、ファツィオリ）を試弾しました。それがファツィオリを弾く2回目。大きいモデルは初めて弾いたのです。選んだ一番の理由は、トレモロ（同音反復）を弾く時に一番フィットしたからです。そして鍵盤の反応もとても正確に感じられました。「もっとこれで練習させてください」と申し込んだのです。まだステージで弾くとは決めていませんでした。練習しているうちに気に入ってしまった。メカニズムもサウンドもです。ファツィオリの音は、他のピアノと違います。よく歌うと言いますか、ピアノメーカーの音ではない、自分の音を奏でることができるんです。ピアニストは時に不快な音も出します。それがきれいな音になってしまうピアノもありますが、ファツィオリはそのまま不快な音が出る。それで、自分の音を作ることができるんです。



アレクサンドル・ルビャンツェフ
Alexander Lubyantsev